

美と醜さへ 哲学から嫉妬を込めて

あらゆる説明から逃れて存在しうることへの嫉妬

金沢大学人文学類長
金沢大学附属図書館長
柴田正良（現代哲学）

木下晋展記念シンポジウム （於）金沢美術工芸大 June, 8, 2010

美しさは暴力だ、醜さもまた

☆ プラトンのように、〈美〉をアイデアの如く存在する、超時空的な客観的存在だとは言えないだろう・・・

第1幕：自然

進化における〈適応価〉としての〈美〉。

自然淘汰に有利な機能を果たすものの一部が〈美しさ〉と呼ばれた。

第2幕：脱自然？

従来の進化圧を脱した人間の、自然淘汰の残滓としての生得的な脳神経系の〈快樂〉。

自然淘汰の新段階が来ないなら、〈美〉は生物学的根拠さえ失いつつあるのかもしれない。

性淘汰によってメスに選択された オスの羽根飾り

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%80%A7%E6%B7%98%E6%B1%B0>




「すべての美しく輝くもの」

C.F. アリグザンダー（英国国教会の賛美歌, 1848）
のパロディ (R. ドーキンス 『進化の存在証明』 p.315)

すべての醜く冴えないもの
丈の低きも地に伏すものもすべて
粗野なものも嫌なものすべて
主なる神が全部つくった
毒牙を打ち込む小さなヘビの一匹ずつに
針で刺す小さなハチの一匹ずつに
神は凶悪な毒液をつくり
その忌まわしい翅をつくった
癌のようにはびこるすべての病めるもの
大小のすべての悪
すべての汚れて危険なもの
主なる神がすべてつくられた／・・・(略)
すべての疱瘡や天然痘
腐って、汚れて、ただれたもの
主なる神がすべてをつくられた

<美>のための、<美>を目指した進化？

第2幕： 何に対する進化圧が働くのか？

- 人間の場合、生物個体の表現系に対する自然淘汰は、進化の第1幕で終了した。
- <美>の領域においては、進化的制約から解放された自由が訪れるかもしれない。

- しかし、その自由は、暗闇からの無根拠な創造なのか。それとも、何かへの進化圧を介した新たな脳神経系の創造か？

有限なる存在者がなす〈表現〉の理由

それでもわれわれ人間は、何かを表現したいという本質(本能)をもつ。

しかし、表現者に安心と帰依を与えてくれる超越的〈理由〉は、(たぶん)存在しない。

有限であるがゆえにわれわれは、そのつどの表現の〈理由〉を自ら創らねばならない、という運命を背負う。

われわれは、表現者の極私的〈理由〉と、表現の中で出会う。自分の存在の根源的偶然性に出会うときと同じように、不思議さと当惑をもって。

さあ、自由だ、嫌になるほど… END